●ロシア

ロシアの「ポスト・フォークロア」

熊野谷葉子

ロシアを代表するフォークロア雑誌『生きている昔』が「現代の諸テーマ」という特集を組んだ一九九五年の第一号、巻頭論文は、S・Yu・ネクリュードフの「フォークロアののちに」であった。「僕たちははるばると遠い地方へ出向いていく。カセットデッキとノートとカメラ、運がよければビデオカメラも持って。（中略）僕たちの目的地は奥の奥の農村、俗世と絶縁しているような漁村、狩小屋、草原や山岳の放牧地（中略）、かつてのしきたりの痕跡があるところ、古い儀礼がまだ完全になくなっていないところ、民衆の口承文芸つまり学問上包括的に『フォークロア』と呼ばれているものが、まだ生きているところだ」（註1）という書き出しを、題とつきあわせて見れば、フォークロア研究者たるもの、何かを感じずにはいられないだろう。

　むちゃくちゃに国土が広く、交通が不便なロシアでは、今日に至るまで農村には水道もガスもなくて当然である（電気はある）。子供たちが水を運び、大きなかまどが暖房を兼ね、家は自分たちの力で建設する。毎年夏に学生の実習をかねて各地の大学から送り出される民俗学調査の参加者は、大量の食糧と自分のシーツを持ち、長靴をはいて悪路を何キロも歩き、小さなグループに分かれてお年寄りの話を聞いては一晩の宿を乞う。農村と都市のこうした生活様式の違いは、西欧で早くに忘れられた昔話や歌謡、呪術の生き延びる場を提供した。だからロシアで「フォークロア」と言えばそれはふつう口承文芸を指し、その担い手（つまり「フォーク」）は「農村に暮らす農民」と同義と言って間違いなかった。

　もっとも、伝承の担い手＝農民＝文盲、という図式には今世紀の初めにすでに揺さぶりがかけられてはいた。都市の知識人たちが、祖国の奥地にまだ残っていた古い叙事詩「ブィリーナ」の語り手に喝采を贈っていた十九世紀末、民衆の間で流行していたのは、単純で軽快な歌謡「チャストゥーシカ」だったが、この歌は、長さは日本の短歌ほど、テーマは日常生活だの色恋だの卑近な（時に卑猥な）もの、メロディーも韻律もいたって単純という代物だったから、知識人たちは、やれ伝統の歪曲だ、いや新しい民衆歌謡の勃興だ、と論戦を繰り広げたのだった。従来の民衆歌謡とちがってテンポが著しく速いこと、押韻の仕方が書承の詩に通じることから、この歌の起源はしばしば都会に求められた。それを出稼ぎ労働の農民が吸収して故郷へ持ち帰り、広めている、というのである。つまりここですでに、「都会」と「フォークロア」は結びついていたのである。

　しかし、起源はともかくとして結果的には、チャストゥーシカは農村の歌謡に落ち着いた。若者たちの集いを中心として、アコー

ディオンやバラライカにのせて歌われ、恋愛や暮らしの様々な側面を即興的に歌い込みながら、二十世紀の農村の娯楽の一部として生き残ってきたのである。今日でもチャストゥーシカは、ロシア各地で比較的簡単に聞くことができる。私は一九九五年と九六年に北ロシアの農村を訪れたが、その際各二週間という短い間に、十代、二十代を除くほとんど全ての年齢層から、五百を越えるチャストゥーシカを聞くことになった。(註2) また、シベリアのある町では地元のチャストゥーシカコンクールに参加したというホームビデオを見せられたし、視聴者が電話をかけてきて自作のチャストゥーシカを歌う、というテレビ番組を見たこともある。

チャストゥーシカよりずっと都会的な性格を持つのが、「アネクドート」である。物言えば唇が寒いどころではすまなかったソ連時代に、文字にならないことこそを強みに人々が盛んに語り合ったのが、政治や社会、人間関係を風刺するこの一口話であった。政治家を小馬鹿にし、男は女を、女は男を笑い、他民族を笑い、自分たちを笑った。アパートのリビングやオフィスの隅でこっそりと語られるアネクドートは立派な「口承文芸」であり、都会人の楽しみだった。

しかし、九十年代に入って状況は一変する。ソ連と社会主義が完全に過去のものになった時、これらの危険な小話は目にみえる印刷物となって、地下鉄のキオスクや街頭で安価に大量に出回るようになったのである。旧体制の記憶がまだ生々しく、生活は依然として苦しく、現在の政治に信頼は抱けず、成り上がりの巨万の富が目を驚かせた九十年代前半、アネクドートは一度に花開いたように見える。単にそれまで活字にできなかったものが読めるようになったというだけではない。「ノーヴィー・ルースキー（新ロシア人）」というカテゴリーが、金もうけは得意だが教養のない成り上がり実業家像としてアネクドートに登場し、清貧のプライド高い庶民は、数ルーブルで彼らを笑い飛ばした。かつてのように声をひそめてではなく、新聞や雑誌で、また街中でおおっぴらに。アネクドートはこんな風に、口承と書承の間を行ったり来たりしながら今も生きている。

二十世紀に特徴的な口承文芸は、他にもいくつかある。前世紀末から歌本を通して農村に広まった歌謡ジャンルの「ロマンス」、レストランや公園のショーで生まれて舞台を下り、街路へ、そして農村へと流入した各種の流行歌がそうだ。これらは起源と伝達の方法を見ればいわゆる口承文芸に含めるのは難しいが、人々の間に定着し、こんにち古い歌を所望するフォークロア調査者に対しておばあちゃんたちが声をそろえて歌い出すところを見れば、それをむげに切り捨てることは、正しいとは言えないだろう。北ロシアでも、おばあちゃんたちが我々に歌ってくれた百二十近い歌の多くは、これらの比較的新しいものであった。儀礼歌や古い叙情歌の特徴がはっきり残っているものは少なかったのである。

前述のネクリュードフは、これらの大衆歌謡とチャストゥーシカを都市文化と農村文化の融合だとして、「古典的（クラシック）フォークロア」と呼ぶ。これに対して、十九世紀までの伝統的なフォークロア、書承

文学との関係の希薄な口承文芸を指して、「古代的（アーカイック）フォークロア」と呼ぶのである。しかし彼は、現代ではこれらのフォークロアの他にも、二つの互いに矛盾する方向性を持つ伝承の形成が認められる、としている。その一つは例えば特定の職場や学校の生徒の間にだけ伝わる伝説や噂話、歌のような「閉じた」伝承の形成であり、もう一つはマスメディアの普及により、以前なら知るべくもなかった監獄のフォークロアだの、子供の間でだけ流通していた恐い話だのが一般の知るところになったことを指している。だが、とネクリュードフは言う。こうした噂話や都市伝説、パロディー化された歌謡曲、膨大に創作されては消えていくアネクドートなどを、「フォークロア」の範疇に入れることができるだろうか？ それらはすでに大地と切り離され、伝統的な生活サイクルとの関係を断ち切られ、自然とも祭りとも無関係に存在するのではないか、と。

ネクリュードフのこの疑問は何を意味しているのか

ロシア人にとって、フォークロアが農村の農民による口承文芸を指すことは既に述べた。そしてそれは「母なる潤える大地（マーチ スィラー ゼムリャー）」に信仰にも似た気持ちを持ち、野の広がりを称える彼らにとって、いわば精神の基盤とでもいうべきものであった。農民でなくとも、いや都会人こそが田舎に対して抱く愛着と憧憬の強さは、恐らく日本人の比ではない。モスクワやペテルブルグのアパートに暮らす普通の人々が郊外の村に別荘（ダーチャ）を買い、週末や夏の二、三ヶ月を畑仕事をして過ごすのは、単に食糧確保のためだけではあるまい。ロシア文学や音楽が、フォークロアに題材を求め続けてきたことも想起しよう。農村の暮らしと伝承への愛着は、正教信仰と並んで、多くのロシア人の価値観の柱なのではないだろうか。だから「現代の都会のフォークロア」という言葉からは、便宜的なものというイメージが抜けないのである。ネクリュードフは論文をこう結んでいる。「もしかしたら、『フォークロアの時代』は過ぎ去ってしまって二度と戻らず、我々の目の前にあるものは全く新しい現象なのかもしれない。そしてそれにふさわしい名称を探すべきかもしれない。例えば『ポスト・フォークロア』のような。」

しかし、その後「ポスト・フォークロア」にあたる語が実際に使われている気配はない。むしろ、伝統的な口承文芸を中心に置きながらも儀礼や習慣、物質文化をも扱いうる便利な用語として、フォークロアという語はそのあいまいさゆえに使われているように見える。そして現在のロシア・フォークロア学は、伝統的な農村中心主義を貫きつつ、都市のフォークロア、子供のフォークロア、労働者のフォークロアというように言葉を補いながら、その対象を着実に広げている。語の定義や学の求心性にこだわって対象を限定する方向へ進まなかったことは、現在の状況にあっては賢明な選択だと言えるだろう。

では、研究の動向について簡単に述べておこう。

最近の一つの大きな流れは、これまでに採録されてきた口承文芸テキストの整理と出版である。フォークロア諸ジャンルのアンソロジー、レコード付きのテキスト集、検閲その他の事情で出版されずにいたテキストの出版、有名な古典の復刻……と、混乱期を経て出

版状況が上向いてきたこともあるだろうが、今まで相当の分量貯えられてきた伝統的なフォークロアのテキストが、ここに来て次々にまとめられている。叙事詩では、レーザーディスク付きの二十二巻全集、未公刊資料も一挙公開、というものが既に宣伝されている（まだ一巻もでていないが）。これなど、これ以上新しい叙事詩テキストは出ないという判断による「決定版」なのだろう。民族学・神話関係の辞書・辞典類の出版も多いが、これも、近年の精密な調査結果を用いながら、百五十年に亘って貯えられてきた資料をまとめておこうということではないだろうか。

その一方で、採録と研究が急ピッチですすめられているのは、森の精や水の精、家霊、その他もろもろの非キリスト教的諸神格にまつわる話である。場所にもよるが、この種の話は意外に今日でも沢山聞くことができる。私が訪れた場所でも、昔話や古い歌は知らない、と首を振る人が、誰それが森の精にさらわれただの、家霊と仲良くつきあうにはどうしたらいいかだの、死んだ夫が帰ってきたのでやっとのことで墓へ帰しただの、そういう話を次々にしてくれることがあった。こういう話はロシアに特徴的なキリスト教と異教の二重信仰の産物で、おそらく非常に古い起源を持ち、しかも現在でも採録が可能、というところが研究者の関心を集めているのだろう。

都市のフォークロアについては、まだ資料を収集している段階、という感がある。増え続ける資料をどう整理し、理論化していくかは、現代のフォークロア研究者の課題の一つとなるだろう。また、ネクリュードフ言うところの「クラシック」に属するチャストゥーシカやロマンスは、古い資料もあり、現在もその生態を見ることができ、しかし伝承の行方に陰りが出てきたという興味深い状態にあるのだが、今のところあまり注目を集めてはいない。

やはり『生きている昔』誌上で、V・E・グーセフは興味深い指摘をしている。各地の民族音楽アンサンブルや音楽院のフォークロア演奏のような「フォークロア活動」とフォークロアそのものとの相互関係を視野に入れて行こうというのである。(註3) 確かに、古い歌や踊りを実体験として持っている人はどんどん少なくなっているが、ロシアの民族音楽アンサンブルの多さと活動ぶりは特筆に値する。

ある時など、村の礼拝堂でたまたま会ったおばさんが、私たちがフォークロアを集めていると聞いて、わずか二日後にフォークロアの夕べを催してくれた。二十代から六十代とおぼしき二十人ほどの女性たちが、おそろいのきれいな民族衣装をまとって、伝統的な歌や踊りを見せてくれるのである。そういうことが行く先々であるので、ロシアでは各地区に一つはアンサンブルがあるのではないか、と思うほどである。そして多くの場合、アンサンブルのメンバーには地元のフォークロアを集めて回っている人がおり、彼女（女性が多い）が中心となってその地の古い歌や踊りを再現している。自然に身についたのではないものを、学んで演奏するわけだから、それを口承文芸と呼べるのかどうか、フォークロアと言えるのかどうかは難しいところだ。だが、もし「ポスト・フォークロア」という用語を使うなら、こんなところで使えればいいのだが、と私は思うのである。

（1）С. Н. Неклюдов, После фольклора // Живая старина, 1995, No.1, pp.2-4.

（2）若者からの採録がないのは、我々がお年寄りを訪ねて話を聞いたためと、この年代の人間は学校や仕事で故郷を離れ、地方都市などに住んでいるため。子供からの採録はあり。なお、この時に採録したチャストゥーシカは、熊野谷葉子「現代の北ロシアのチャストゥーシカ」（東京大学スラヴ語スラヴ文学研究室年報『SLAVISTIKA XII』,1996）に掲載。

（3）В. Е. Гусев, Жив ли фольклор? // Живая старина, 1995, No.2, pp.9-11.

（くまのや・ようこ／東京大学大学院）

●中国

北方農村の「語り物」の場合

井口淳子

概況

中国の広大な国土の大半は農村地域であり、そこに暮らす農民は現在においても「文字文化」とは縁遠い生活を営んでいる。かれらの日常生活に書物が関わることはきわめてまれではあるが、それにとって替わる豊かな「口承文藝」が伝承されてきている。ここでは「口承文藝」（中国では「民間文学」あるいは「民間文藝」）と総称される数多くのジャンルのなかから「語り物」をとりあげ、その現状を一九八八年から継続して行なってきたフィールドワークにもとづいて報告する。

中国では、物語をうたい語る「語り物」は、「曲藝」あるいは「説唱」と総称され、現在、全国に三四一種の曲種（註1）がみとめられ、それを担う演唱者や伴奏者、テキストの創作者の数は膨大な数にのぼる巨大なジャンルである。とくに曲種の多さはこの国の方言の多様性と深く関係しており、筆者が研究対象としている語り物曲種「樂亭大鼓（ラオティンタークー）」（註2）も河北省樂亭県、灤南県一帯の方言圏がこの語り物の